

「日経トップリーダー」
経営者クラブ

Monthly

2020. 11

●インタビュー…03

メンタル不調は早めに対処を

精神科医 作家 榊沢紫苑氏

●発見! 元気印企業…04

1896年創業の機械刃物メーカー

岐阜県関市 / 福田刃物工業

害虫・シロアリ防除で地域貢献

新潟市中央区 / 新潟米山薬品

●経営塾…08

はやり廃りの経済論

はやり廃り短期化の原因

●生産性UPの手順…10

既存事業をイノベーションしよう

新潟米山薬品は、地元の外食店などでの害虫駆除、戸建て住宅のシロアリ防除などを担っている。写真はシロアリ防除の床下作業

発見
元気印
企業

信頼の害虫・シロアリ防除で 地域住民の役に立つ会社を堅持

害虫・シロアリなどの防除はなくてはならないサービスである一方、強気の訪問販売で顧客を悩ます事業者が少なくない。この業界で、長年、地域顧客との信頼関係を築いてきたという新潟米山薬品。地元密着の裏方的サービス企業は何を重点に経営しているのか取材した。(編集部)



新型コロナウイルス禍の中では、感染の陽性者が出た建物の消毒作業を請け負った。防護服に身を包んでの作業だ

新潟米山薬品は、ゴキブリ、スズメバチ、ネズミといった害虫害獣の駆除と、家屋のシロアリ防除を実施する会社だ。売り上げの約6割が害虫害獣駆除で、顧客の多くはホテルやレストラン、飲食店など厨房設備を持つ施設、ほかに公共施設や寺院、スーパーマーケットなどがある。主に年間契約で月に1回など定期的な防除作業をする。現在、同社の取引先は地元新潟県内に550社ほどあり、現場の社員6人がそれぞれ月におよそ100件もの防除作業に奔走しているという。

シロアリ防除は、ハウスメーカーか

らの依頼で、新築から10年保証の期間が終わる戸建て住宅を対象に、年に300件ほど実施しており、売り上げの約2割になる。ちなみにシロアリ防除は1件につき約2時間かかる床下作業とのことだが、作業中も住人は家の中で普段通り過ごせるという。このように新潟米山薬品は基本的にはB to Bの害虫害獣・シロアリ防除を実施しているが、一般家庭からスズメバチの巣がある、ハクビシンが出たといった助けを呼ぶ声にも対応している。

ところで、防除事業者の中には突然一般家庭などに押しかけ、施工を断れ

ないよう話を進め、契約に持ち込む強引な事業者もいる。このような業界について山口浩二社長に尋ねてみると、「当社は訪問販売はしない。業界の協会にも複数加入し、50年以上、地域顧客との信頼関係を構築してきた」という。一方でブログを書いたり、地元の新聞やラジオなどに積極的に登場するなど情報発信活動に力を入れている。

同社は薬局「ファーマシーよねやま」を経営しており、地元では薬局の会社というイメージもある。現場の社員が、同社の薬剤師から防除の薬品成分の知識を学ぶなどして「防除のお客

新潟市中央区

新潟米山薬品

会社概要 ●株式会社新潟米山薬品:1966年設立。害虫防除、シロアリ駆除など環境衛生対策事業、薬局運営事業。2018年に福岡営業所開設。売上高:約1億5000万円。従業員数:16人。本社:新潟市中央区女池8-15-16 TEL:025-283-6333
https://yoneyamayakuhin.co.jp/

新潟駅の南側にある薬局「ファーマシーよねやま」。薬剤師が常駐し、地元密着の薬局として地域住民に愛されている。写真は薬局スタッフ



様にも、より適切な薬剤の提案ができるのは当社ならでは(山口氏)。同氏はこう続ける。「現場作業をするほとんどの社員は十数年以上勤務してくれている。休日や早朝、深夜の作業もある過酷な仕事にもかかわらず、社員が辞めないのも当社の特徴だと思っている。家族を養うためにたくさん稼ごうという社員もいれば、しっかり休んでプライベートを充実させたい社員もいる。それぞれの働き方を尊重している」。

事業規模はこれでよい

山口氏は福岡県筑紫野市出身。26歳まで福岡で過ごす、勤務していた医療メーカーの転勤で東京へ。その後、結婚を機に妻の実家の新潟市に移り住む。新潟でも医療メーカーに勤務したが、移住から半年後に妻の父から「自分の会社に入らないか」と声を掛けられた。それが新潟米山薬品だった。

後継者候補として1990年に入社した山口氏はしるあり防除施工士や建築物などの防除作業監督者といった業務に必要な資格を取得しつつ10年ほど現場で仕事を学んだ。「これまで医療機器など、人を生かす機器を販売してきたが、今度は殺虫する仕事。心にモヤモヤを感じていたが、ある日お客様に、人の健康を守る目的はどちらも同じだと言われ、すっと腹に落ちた。それ以来、仕事が楽しくないと感じたことは一度もない」と山口氏は話す。

その後山口氏は新潟青年会議所に入

会し、新潟県内外の経営者との出会いに恵まれる。「創業者もいれば二代目、三代目もいる。業界もさまざまで発想も豊かな人たちと議論を繰り返すのは刺激的だった(山口氏)と経営者魂を育てていったようだ。

不景気でも害虫やシロアリがいなくなることはないため、防除の仕事は景気に左右されないといわれるが、今回のコロナ禍はどうだったのだ



新潟米山薬品 代表取締役
山口浩二氏

やまぐち・こうじ 1961年、福岡県筑紫野市生まれ。医療機器メーカー販売を経て90年新潟米山薬品入社。98年から現職。公職に新潟県しるあり防除協会会長など(写真:尾越まり恵)

トップの思い

日々誠実に 縁の下から支える

新潟に移り住んで、30年。今では故郷福岡で過ごした時間よりも長くなりました。経営者の知り合いも増え、この土地で育ててもらったと感謝しています。

社長に就任し、「夢・情熱・感謝」という社是をつくりました。地元で根差し、人々に感謝される会社でありたいという思いを込めました。我々が運営する薬局「ファーマシーよねやま」も地元の人々との触れ合いを大事にしています。ドラッグチェーンが台頭する中で、1店舗だけの小さな薬局ではありますが、日々、地元の人々が健康相談に訪れています。

我々が担う害虫・シロアリ駆除の仕事は、閉店後や開店前の店舗、自宅の床下作業です。見えないところで、人々を支える縁の下の力持ちとして、1件1件誠実に仕事をしています。社員にはすべて「自分の家だと思って作業しよう」と伝えています。そうすると、手を抜くことはあり得ません。(談)

(特記以外の写真:新潟米山薬品)